



<調査・モニタリングの結果>

1 水温調査

(1) 月別（7月～9月）の平均水温と最高水温

① 斜里町側（西側）

斜里町側で平均水温が15℃前後を記録した河川は、「糠真布川」「オチカバケ川」「オショバオマブ川」「金山川」「オペケブ川」「オショコマナイ川」「イウウベツ川」「テッパンベツ川」の8河川で、うち遺産地域内は「イウウベツ川」「テッパンベツ川」の2河川である。これらの河川においては、月最高水温についても20℃前後を記録している。その他斜里町側の河川は盛夏（8月）の平均水温が12℃以下、月最高水温では10℃～15℃程度を記録した。

なお、「テッパンベツ川」については8月2日～5日まで一時期に高温を記録したが、H25.12上流側右岸で発生した「地すべり性崩壊」による土砂の流出の影響により水温計の設置条件に影響を与えた可能性、「イウウベツ川」については、温泉水の流入の影響による可能性が考えられる。

② 羅臼町側（東側）

羅臼町側の河川においては、高ダム密度河川である「精進川」「チニシベツ川」「羅臼川」で平均水温が14℃前後、最高水温は19℃前後を記録した。その他羅臼町側の河川では平均水温が12℃前後であり、最高水温が16℃に達しない河川も多く存在した。

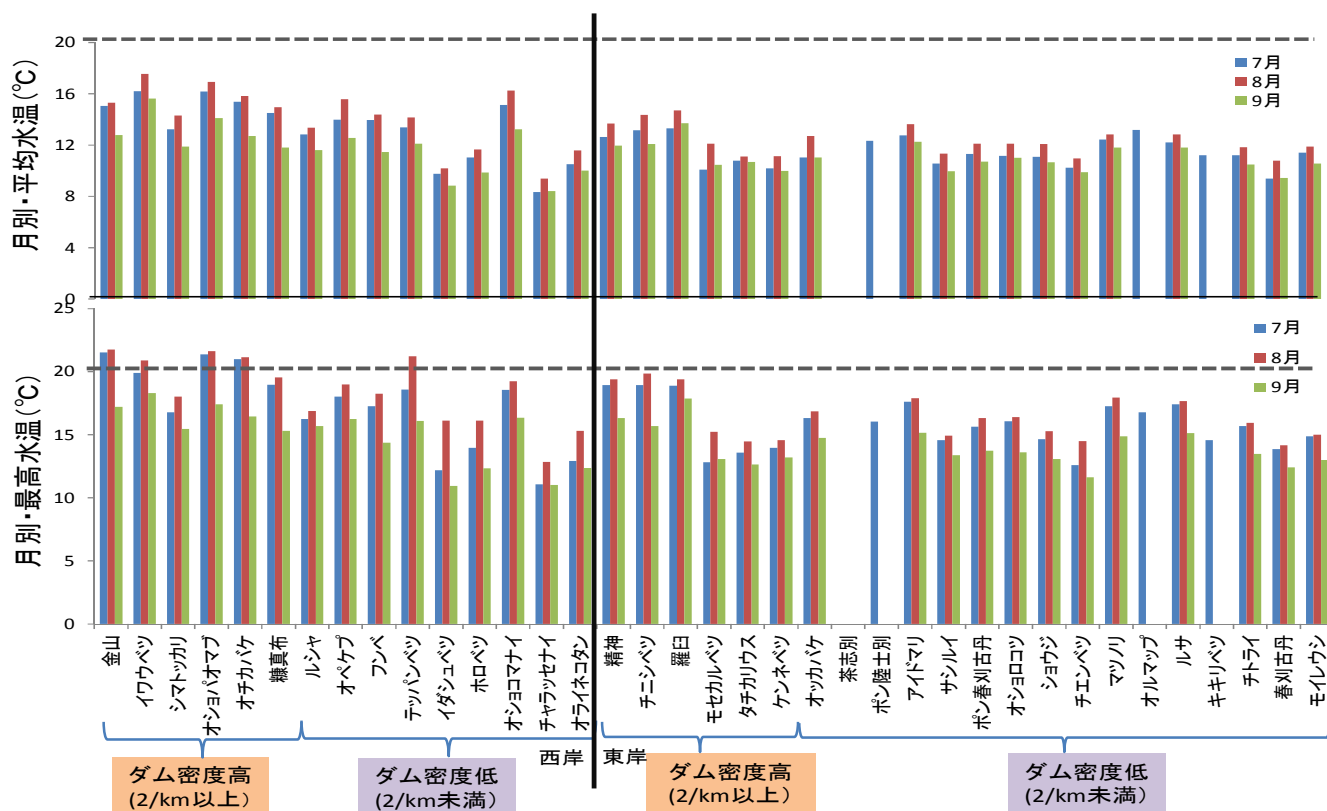
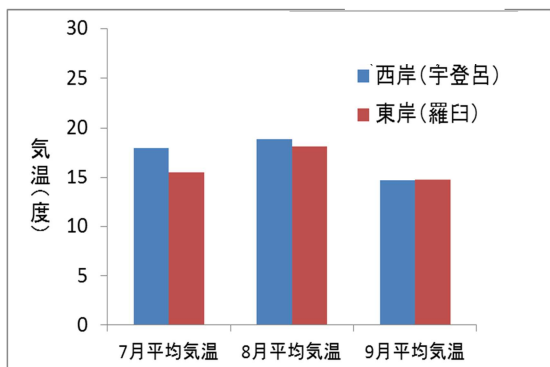


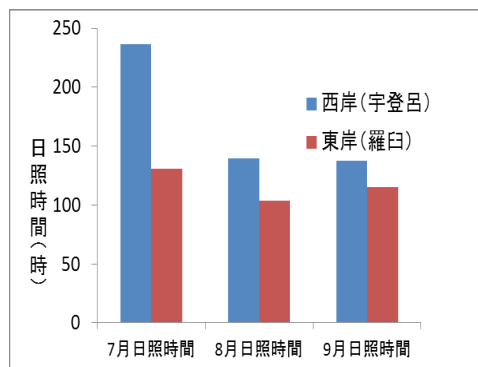
図-2 水温調査結果

<参考>

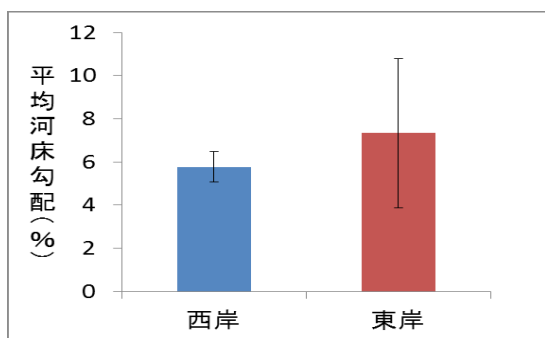
斜里町側（西側）河川群が羅臼町側（東側）河川群よりも水温が高い傾向となる理由としては、斜里町側の気温が羅臼町側に比べて高いこと。斜里町側（西側）の日照時間が羅臼側（東側）よりも長いこと、斜里町側（西側）の河川勾配が緩い傾向にあることから、水温の上昇を招きやすいことが考えられる。



H26 (2014) 年度の西側と東側の気温



H26 (2014) 年度の西側と東側の日照時間



西側と東側の河川勾配

図-3 西側河川と東側河川の比較

(2) ダム密度の高い河川とダム密度の低い河川の日平均水温比較 (H12 (2000 年) ~ H26 (2014 年))

日平均水温については、明瞭な経年的な水温上昇は認められなかった。

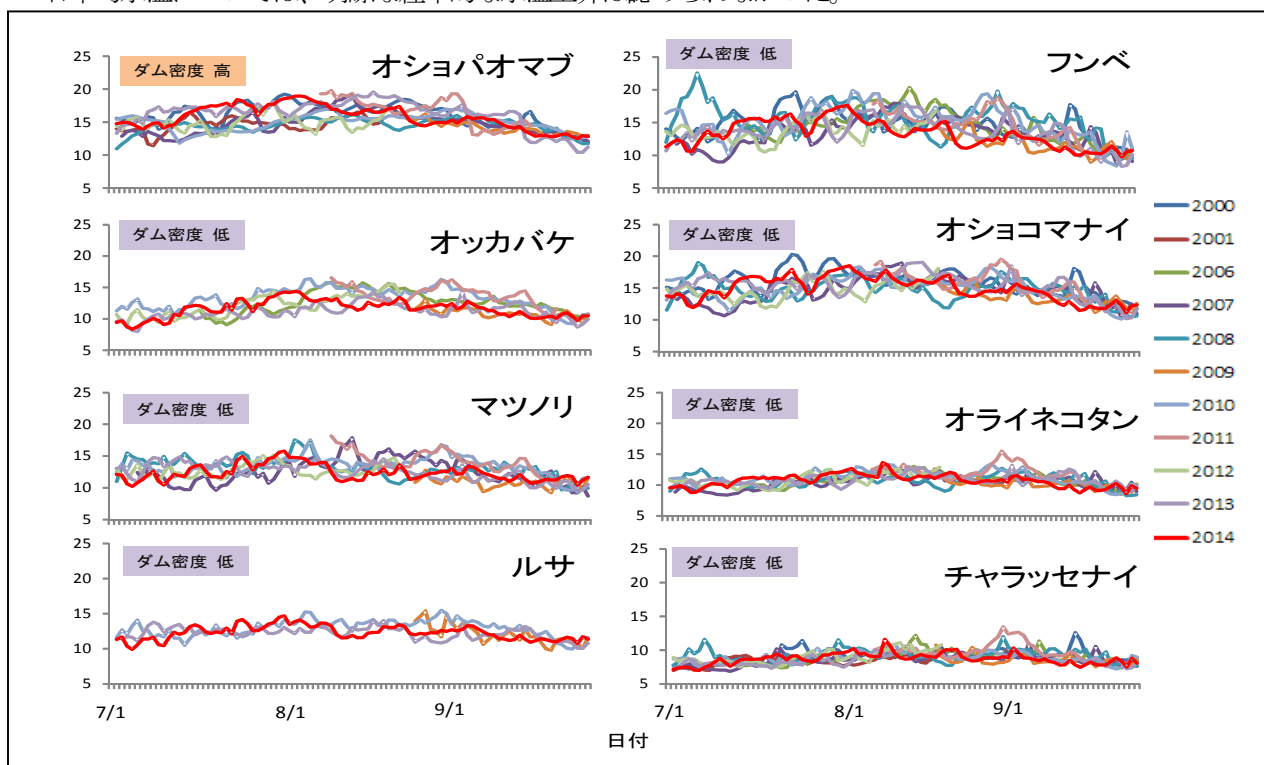


図-4 調査対象河川の日平均水温 (°C)

2 魚類調査

(1) オショロコマの生息密度

過去の調査結果 (H14, 2002) と比較したところ、「オショパオマブ川」では、H14, H26 調査ともに採捕されなかった。

「フンベ川」「オショコマナイ川」では、過去の調査では低密度ながらオショロコマが一定数採捕されていたが、「フンベ川」では0尾、「オショコマナイ川」では0.6尾と極端な密度の減少傾向がみられた。

「チャラセナイ川」「オッカバケ川」「ルサ川」では、生息密度の増加傾向がみられる結果となった。

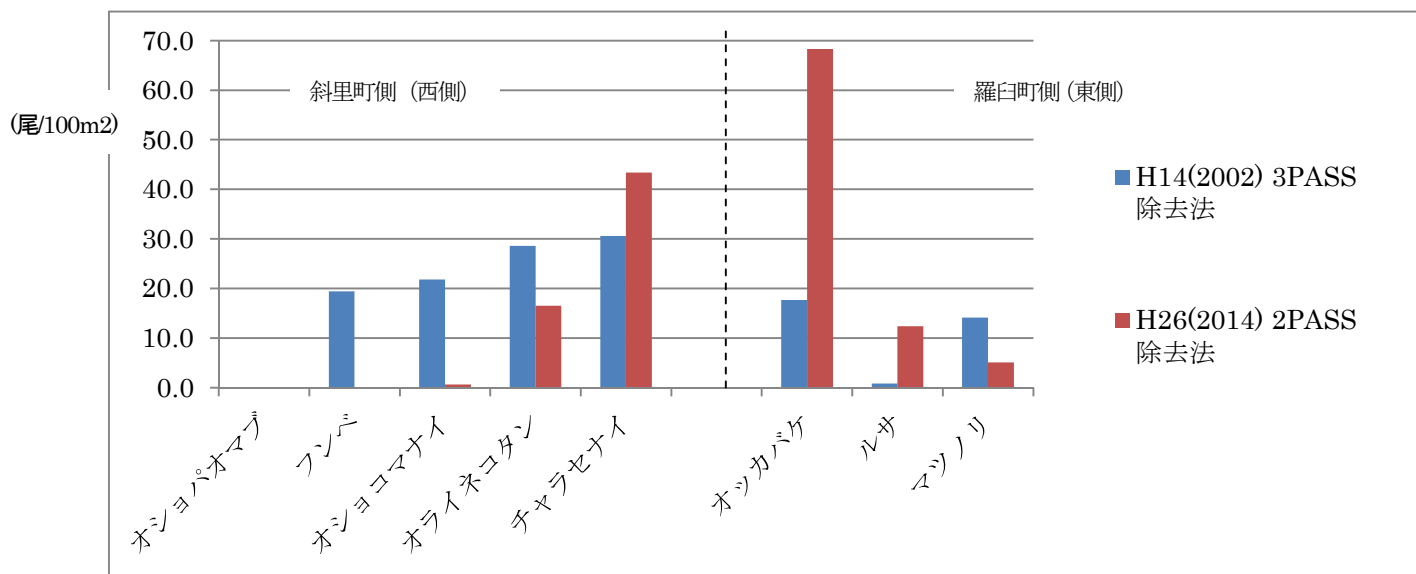


図-5 オショロコマの生息密度

(2) オショロコマの河川別尾叉長

調査対象8河川における H26 年度と過去の調査結果から尾叉長組成を下記の図-6に示す。

H26 年度オショロコマが低密度であった3河川について、「フンベ川」「オショコマナイ川」は過去の調査で幅広い年級群が確認されていた河川であるが、「オショパオマブ川」は2012 年度調査から幅広い年級群が確認されていない河川である。

なお、これら3河川はともに夏季の平均水温が高い河川であった。



西側「チャラセナイ川」



東側「オッカバケ川」

写真-1 調査により捕獲したオショロコマ

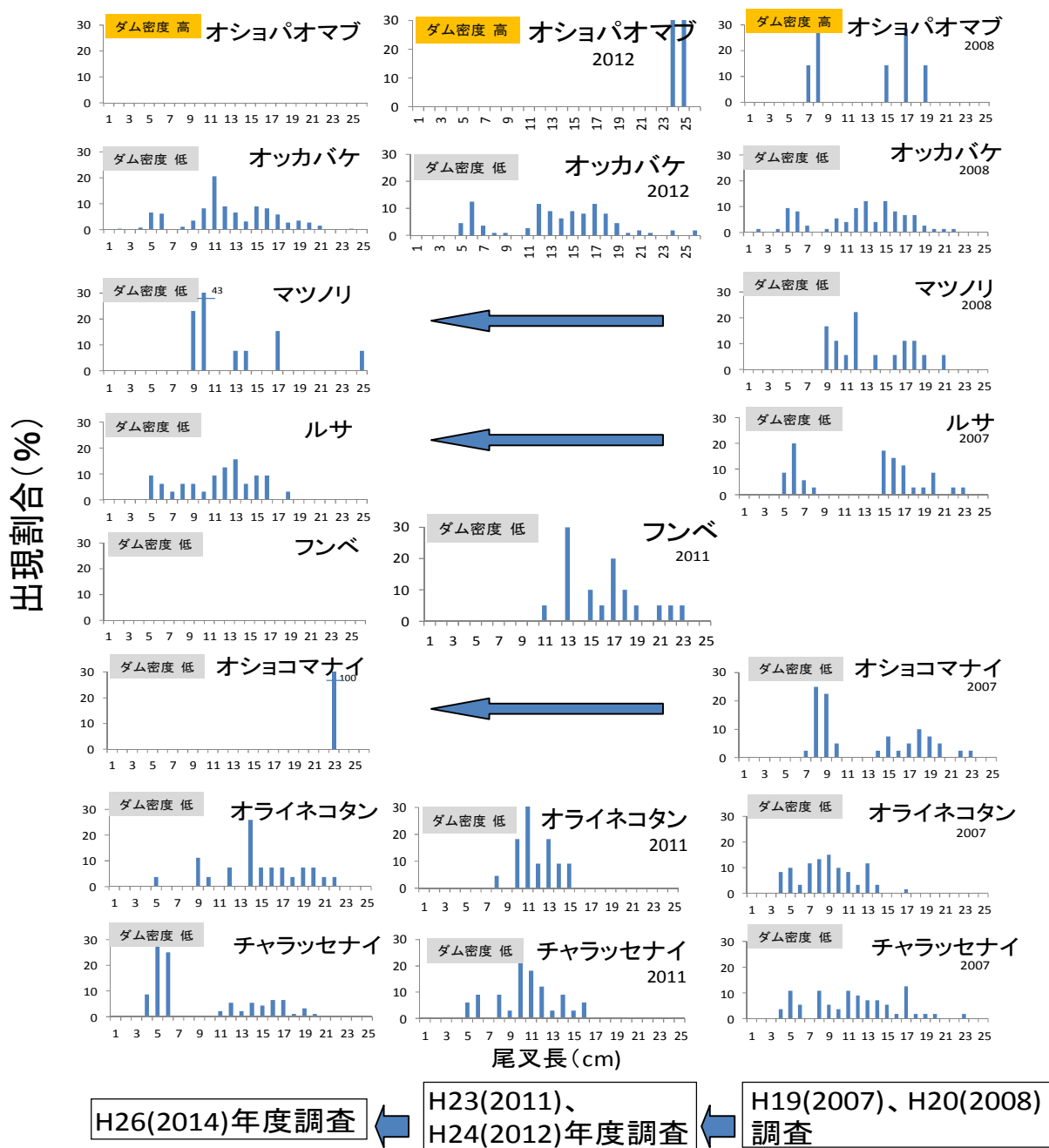


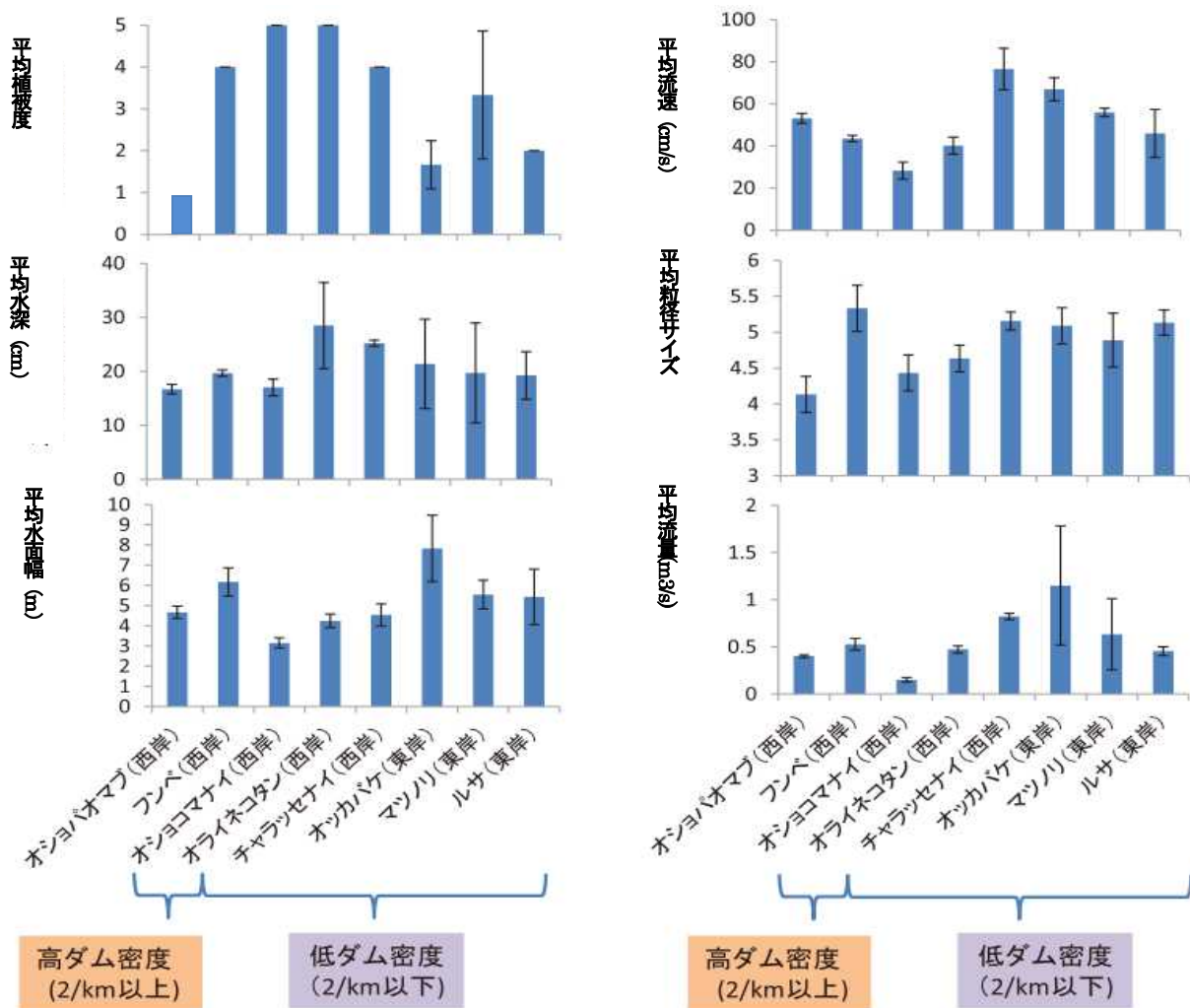
図-6 河川別・オシヨロコマ尾又長組成

(3) 河川別の物理環境

魚類生息調査を実施した8河川について物理環境の調査を実施した。

上記「2 (1) 魚類調査」でオシヨロコマの生息密度が低かった3河川(フンベ川、オシヨコマナイ川、オシヨパオマブ川)の物理環境調査結果の特徴としては

- ① 植被度はオシヨパオマブ川が一番低い結果となった。
- ② 平均水深は3河川とも水深が浅く、平均流量も少ない結果となった。
- ③ 平均水面幅、平均流速、平均粒径サイズについては特徴的な傾向は見られなかった。



図ー7 河川別物理調査の結果

(4) 外来種等の魚類の生息状況

魚類生息数調査を実施した8河川のうち、東側の河川「ルサ川」「マツノリ川」のみ、「カンキョウカジカ」等の魚種が確認され、「マツノリ川」で採捕された「サクラマス」は密度が小さく、降海型と河川型両方の個体と思われるサイズが確認された。なお、ニジマス等の外来種は確認できなかった。

河川名	オシロコマ	カンキョウカジカ	サクラマス	シマウキゴリ
オッカバケ	68.3	0	0	0
オショパオマブ	0	0	0	0
ルサ	12.4	19.0	0	14.0
マツノリ	5.1	16.8	1.6	103.5
フンベ	0	0	0	0
オショコマナイ	0.6	0	0	0
オライネコタン	16.5	0	0	0
チャラッセナイ	43.4	0	0	0

単位(n/100m<sup>2</sup>)

図ー8 H26 年度調査 河川別捕獲魚種一覧



(5) シマトツカリ川とチニシベツ川の追加調査

調査範囲とした下流域(シマトツカリ川:河口から 500mまで、チニシベツ川:河口から 300mまで)では、平成 25 年と同様にオショロコマを確認することはできなかった。

ニジマスは両河川ともに採捕されたが、平成 25 年に駆除活動が行われたシマトツカリ川では尾叉長 7~9cm クラスが大きく減少していたことから、この駆除の効果と考えられる。

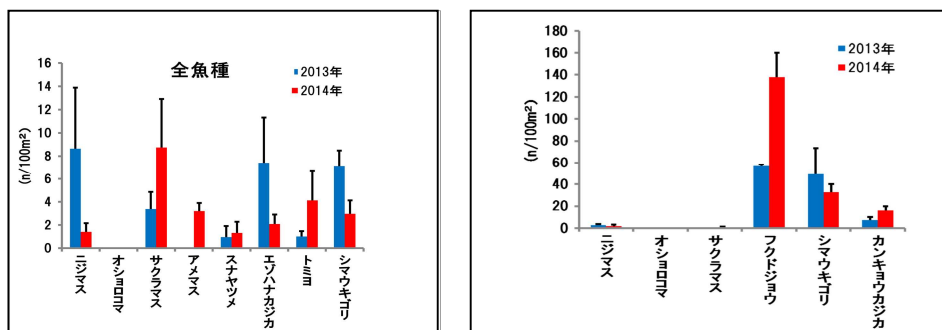


図-9 H25、26年にシマトツカリ川(左グラフ)及びチニシベツ川(右グラフ)において確認された魚種の生息密度

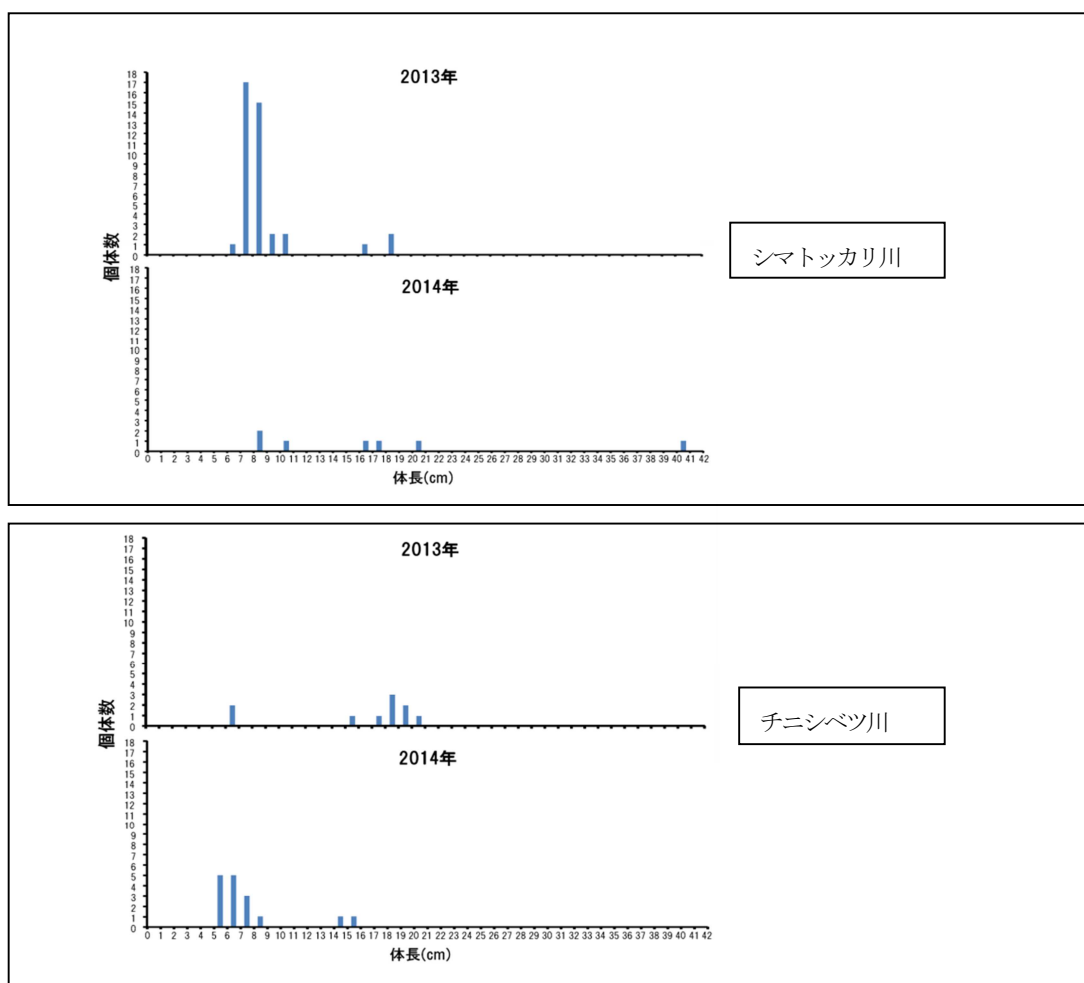


図-10 ニジマスの体長(尾叉長)分布変化